

発掘！文化連続講座

第3回

大田の彼岸市

～中日つあんのうつりかわり～

大田町 山 根 明 人

1 はじめに

私が彼岸市について学ぶきっかけとなったのは「島根地理学会40周年記念誌」に投稿させてもらったことである。

大田市では毎年春と秋に彼岸市（「中日つあん」といわれている）が行われ、近郷近在より多くの人々が集まり、賑わいを見せている。「その起源はいつごろか、どのように変遷し発展

してきたのか、人々の暮らしに与えた影響は」といったことについて調べているが、まだまだ不十分で、それからずっと少しずつ追究している現状である。

本稿では、彼岸市のうつりかわり、特に江戸時代までのところを略述したい。

2 彼岸市のうつりかわり

彼岸市の起源については、様々な論議がなされている。

即ち、大田に記録として残っている「市」には以下のようなものがあり、それが彼岸市に発展していったと考えられる。

天正年間（1573～91）

に大田町城山の円応寺薬師堂で8月23日から30日までの8日間、薬師市が開かれ、市は大田町雪見まで広がるにぎやかさだったとのことである。「円応寺薬師縁起」によれば、諸国商人が「異国之珍物」を持ち来たり、その盛大なることは、長安の市に比すべきであったとある。

寛永20（1643）年、吉永に会津若松より左遷されてきた加藤内蔵助明友は、天和2（1

682）年、近江へ移封される40年余りの間、市の立つのを助けた。即ち、前述した薬師市と粕戸（今の蛭子付近）の慈雲寺境内にあったお稲荷さんの市を定着するように奨励し、その稲荷市では馬喰市（牛馬市）を新設させた。

そのころ、北の上（今の相生付近）では竹市が開かれていた。そして、春の彼岸に「市」を開くようにすすめ、付近で行われ

ている「市」を彼岸市に統合するようにした。彼岸は季節の変わり目で、農具や竹、植木などを日用品などとともに、商人がもって集まるようになり、あわせて牛馬市も催すなど、大マーケットの如くであった。人を集散させることにより、税の収入増をはかったと考えられる。

このように当時の「市」は年間を通じて、この他の日にもたびたび開かれたようである。牛馬市



△昭和58年秋の彼岸市
こうぎん前の三叉路付近から駅方面

は半夏市の日を開くようになったようであるが、広島藩の頼杏平が文政7（1824）年に石見を旅した時、5月9日に大田で牛市を見たところ、不定期に開かれていたとも考えられる。牛市は粕戸で幕末にも開かれていた記録があるので、粕戸、北の上、新市（今の雪見付近）で各々ずっと開かれていたようである。

彼岸市は一般的な市の呼び名で、薬師市、稲荷市などのように区域毎にその名は後世まで使用され伝えられてきたと考えられる。

おそらく江戸時代の終わりころには、彼岸市としてまとまっていたであろうと考えられるが、それがいつ頃で誰によってなされたかはつきりしない。

3 おわりに

大田の彼岸市について、その歴史の一端を記した。明治以降の変遷、人々の暮らしに与えた影響、現状や課題、さらに参考とした文献や資料、彼岸市の略年表等々については、次の機会に譲りたいと思う。